

OG訪問

本学が日本で初めて看護と福祉を統合した看護福祉学部を開設したのは1993年。いまでは多くの卒業生が全国各地で管理職として医療の進展に貢献しています。今回ご紹介するのは、本学卒業後、一貫して精神看護の進展に力を注ぐ看護福祉学部看護学科1期生の吉野さんです。

五稜会病院(札幌) 看護部長

吉野 賀寿美さん (看護福祉学部看護学科1997年卒業)



■ チャレンジできる環境を

五稜会病院は、本学の看護、心理、ソーシャルワークの実習で学生や大学院生がお世話になることも多い精神科をメインとした病院です。吉野さんはここで看護福祉部の長として、全193床の病棟、外来、訪問看護室、地域生活支援室、デイケアセンター、医療相談室の運営、管理にあたり、看護師をはじめ優に100人を超える医療スタッフを率います。重視するのは各部門が自律的に機能する組織づくりと、そのための対応力あるスタッフの育成です。「スタッフの勉強したい、成長したいという気持ちを尊重し、応援しています。当院の看護師の多くが就職する時点で精神科看護に高い目的意識を持っているので、応援しがいがあります」と吉野さん。この「応援」には説得力があります。なぜなら、吉野さん自身がこれまで、学びたいという強い気持ちを抑えることなく、時には臨床と並行して、時には中断して、アカデミックな学びを選択してきたからです。その最初が、本学への編入学でした。

■ 臨床から大学、留学、博士号

本学に看護学科ができたのは、吉野さんが短大を卒業し看護師として働き始めた年です。道内で初めて看護の学士が取れるようになった

たことを知った吉野さんは、2年後にいったん臨床を離れて本学看護学科3年次に編入学しました。在学中に精神看護に志が定まり、1期生として卒業した後は精神看護の先進地、英国に留学、修士号を取得しました。帰国後、看護師としてキャリアを再スタートさせましたが、よりよい看護を追求したいと、今度は本学大学院看護福祉学研究科博士課程に入学。大学院在籍中は一時臨床を離れ本学助教になった期間もあります。多忙もあって博士課程満期時に論文は間に合わなかったものの、臨床に復帰後、論文で博士号を取得しています。

■ ファミリーワークの普及へ

吉野さんはいま、臨床活動として英国で生まれ治療ガイドラインにも採用されている「メリデン版訪問家族支援(ファミリーワーク)」の日本での普及活動に力を入れています。英国でトレーナーの資格を取得して以来、養成講座を中心に支援者(実践者)の育成にあたっています。

ファミリーワークは、支援者が患者さんの家庭を訪問し、家族が揃った中で一連のセッ



人間力が問われる精神看護での吉野さんの姿勢は「病気はその人の一部であって、全部ではない」。その姿に学ぶ後輩看護師には本学卒業生や、CNS(専門看護師)を取得した本学大学院修士生もいます。

ションを行う行動療法的家族療法です。本人と家族の病気への理解を深め、コミュニケーションを円滑にし、さまざまな問題を自分たちで話し合っで決める力を家族が獲得するまでを支援します。支援を受けた家庭では、精神疾患の再発率が大きく低下するというエビデンスがあります。「3か月から約1年と、家族によって要する時間は異なりますが、『こんな力が隠れていたのか』と感動する場面がたくさんあります。日本には家族が辛い思いをしたり犠牲になったりするのとは当然という考え方が根強く残るので、普及活動を通して家族への支援の重要性を訴えています」(吉野さん)。

■ 「学びたい」にゴールはない

吉野さんから伝わってくるのは、「やりたいことをやる」「学びたいから学ぶ」、そして「看護が好き」という強烈な気持ちです。「いまの私があるのは、この職場が新しいことに挑戦する気持ちを尊重し、後押ししてくれたからです」と、次の世代のための環境づくりを進めながら、まだまだ自身の成長のスピードも緩めません。自分の気持ちにまっすぐに、妥協や言い訳のかけらも見せずに挑戦を続けている吉野さん。その重責や多忙を一切感じさせることなく軽やかで、楽しそうに前を向く姿がかっこいい1期生です。



2015年に英国でのファミリーワーク・トレーナー研修後にヤングケアラー支援団体を訪問した時の1枚。吉野さんは現在、ファミリーワーク普及を図る一般社団法人ジャパンファミリーワークプロジェクトの副代表も務めます。